Osaka University Knowledge Archive

Title	上海博物館蔵戦国楚竹書『子羔』の再検討
Author(s)	福田, 哲之
Citation	中国研究集刊. 2003, 33, p. 82-90
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61156
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

上海博物館蔵戦国楚竹書『子羔』の再検討

福田哲之

序言

一九九四年、上海博物館は香港の文物市場に流出した一二〇〇枚余りの戦国楚簡を購入した。この上海博物館蔵戦国楚竹書（以下、上博楚簡と略記）は盗掘されたものであり、出土時期や出土地などは一切明らかにされていない。馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書（一）』（上海古籍出版社、二〇〇一年十一月）の「前言：戦国楚竹書的発現保護和整理」によれば、出土地については、湖北省からの出土という話が伝わっており、流出した時期が郭店一号楚墓の盗掘時期と接近していることから、郭店墓地出土の可能性も考慮されるが、確証はないという。また竹簡の年代については、「上海博物館竹簡様品的測量証明」と中国科学院上海原子核研究所の分析によって、戦国後期という測定結果が出されており、竹簡の内容や字体の検討、郭店楚簡との比較などを総合して、楚が郢から都を遷す前二七八年以前の貴族の墓に副葬されていたものであろうと推定している(注1)。

現在までに全六冊からなる上博楚簡の正式な報告書のうち『上海博物館蔵戦国楚竹書（一）』と『上海博物館蔵戦国楚竹書（二）』（上海古籍出版社、二〇〇二年十二月）との二冊が刊行されている。第一冊には『孔子詩論』『紂衣』『性情論』、第二冊には『民之父母』『子羔』『魯邦大旱』『従政（甲篇・乙篇）』『昔者君老』『容成氏』の全竹簡の図版・釈文考釈が収録され、これらによって上博楚簡の本格的な研究が緒についたところである。

このうち第一冊所収の『孔子詩論』と第二冊所収の『子羔』『魯邦大旱』とは、竹簡の形制や字体の合致から同一の冊書であった可能性が指摘されている。そのことはすでに馬承源氏が『孔子詩論』釈文考釈のなかで言及していたが、昨年末にようやく第二冊が刊行され、ここにはじめて三篇を総合した研究が可能となった。小論ではこうした経緯を踏まえ、三篇のうちの『子羔』を中心に再検討を加えるとともに、全体の構成や冊書としての性格

などについても若干の論及を試みてみたい。

一

上博楚簡『子羔』の竹簡は現存十四枚、現存字数は三九五字、第五簡の背面に篇題と見られる「子羔」の二字が記されている。竹簡はすべて残簡であり、缺失した簡も少なからず存在すると見られ、内容を十分に把握し難い点が多い。ここで以下の行論の前提として、馬承源『子羔』釈文考釈にもとづく訓読を掲げる(注2)。

……以て有虞氏の楽正の宮（龔）は、舜の子なり。子羔曰く、何の故に以て帝為るを得るやと。孔子曰く、昔者而て世を歿うるや、善と善と相受くるなり。古は能く天下を治め、万邦を平らぐるに、少・大・肥・磽有ること無からしめ、皆…しむ。【第一簡】

……か。伊堯の徳は則ち甚だ温なるか。孔子曰く、鈐よ、舜は童土の田に徠むれば、則ち【第二簡】

……の童土の黎民なり。孔子曰く、……【第三簡】

吾聞く、夫れ舜の其の幼きや、毎ごとに□を以て其の言を寺……【第四簡】

……或に慶を以て遠し。堯の舜を取るや、諸を草茅の中従りし、之と礼を言らば、悦びて□……【第五簡】（背面「子羔」）

其の社稷・百姓を得て奉じて之を守る。堯は舜の徳の賢なるを見る。故に之に譲る。子羔曰く、堯の舜を得るや、舜の徳は則ち誠に善……【第六簡】

亦た絹す。先王の遊ぶや、道の奉盥せざれば、王も則ち亦た大渟せず。孔子曰く、舜は其れ受命の民と謂うべし。舜は、人の子なり。……【第七簡】

……[illegible]而して和す。故に夫の舜の徳は其れ誠に賢なり。諸を畎畝の中に播き、而して君をして天下而く偁げしむ。子羔曰く、舜の如きは今の世に在りては則ち何若。孔子曰く【第八簡】

子羔、孔子に問いて曰く、三王者の作れるや、皆人の子なり。而して其の父は賤しくして偁げるに足ら

ざるか。敔も亦た天子と成るか。孔子曰く、善きかな、爾の之を問えるや旧し。其莫……【第九簡】

……妊みて背を劃きて生じ、生ずるや而ち能く言うは、是れ禹なり。契の母は、有娀氏の女……【第十簡】

……なり。伊を観て之を 𠂤 参に得るなり。瑶台の上に遊ぶに、鵶の卵を銜うる有りて、諸を其の前に錯く。取りて之を呑めば、𠂤 【第十一簡】

……欽、是れ契なり。后稷の母は、有邰氏の女なり。串咎の内に遊び、終に芙攷を見て之を薦む。乃ち人の武を見る。履みて以て祈祷して曰く、帝の武尚わくは…せしめ【第十二簡】

……是れ后稷の母なり。三王者の作るや是の如し。子羔曰く、然らば則ち三王者は孰れか…と為す……【第十三簡】

……□三天子之に事う。一（白簡）……【第十四簡】

『子羔』の内容・構成について、馬承源『子羔』釈文考釈は以下のように述べている。

簡文記述孔子答子羔所問堯・舜和禹・契和后稷之事、内容分兩段、一爲堯・舜、一爲禹・契・后稷等参王、兩段之間相連的文字已缺失、但爲同一人手迹、形體和上博竹書《魯邦大旱》・《孔子詩論》完全相同。本篇最後文字内容是「参天子」、並有墨節、其下有相當於十三或十四個字的空白段、説明有關参王内容的簡應列於後段、有關堯舜的内容列於前段、墨節是篇末結束記號。

すなわち馬承源氏は、『子羔』の内容は孔子と子羔による堯舜に関する問答と禹・契・后稷の三王に関する問答との二つの部分からなり、両者の間を連結する文字はすでに缺失したとし、最後の第十四簡が「三天子」の内容をもち、墨節が付されてその後が白簡となっていることから、三王の内容が後段、堯舜の内容が前段に配置され、墨節は篇末を示す記号と見るのである。これを図示すると、以下の通りである［図1］。

［図1］

堯舜部分

【第一簡】
【第二簡】
【第三簡】
【第四簡】
【第五簡】（背面「子羔」）
【第六簡】
【第七簡】
【第八簡】
…（連結簡缺失）

三王部分

【第九簡】
【第十簡】
【第十一簡】
【第十二簡】
【第十三簡】
【第十四簡】―（墨節）

次章ではこの見解をもとに、あらためて各簡の内容について再検討を加えてみよう。

二

『子羔』十四簡のうち、まず堯舜部分の第一簡を除く七簡について見ると、第二簡・第四簡・第五簡・第六簡・第七簡・第八簡にはすべて「堯」「舜」あるいは「舜」の文字が見え、各簡の内容からも堯から舜への禅譲という主題に関わることが明らかである。「堯」「舜」あるいは「舜」の文字が見えない第三簡についても、「童土の黎民なり」という語が第二簡の「舜は童土の田に徠むれば」の部分と密接な関連を有し、堯舜部分の簡と見なすことができる。

一方、三王に関わる六簡について見ると、第九簡には「三王者」「天子」、第十簡には「禹」「契」、第十二簡には「契」「后稷」、第十三簡には「后稷」「三王者」、第十四簡には「三天子」と相互に共通する語が見える。また内容面からも、第九簡には三王者の父親に関する子羔の問い、第十簡、第十一簡、第十二簡、第十三簡には三王者の母親と出産に関する記述があり、いずれも三王者の誕生という主題に関わることが明らかである。

それではここで、留保していた第一簡について見てみよう。

第一簡は上端が残缺し、後続も不明であるため内容を

十分に把握し難いが、初めの部分は、「有虞氏」の楽正であった宮（夔）が、宰の子であるとの記述が見え、その後に「子羔曰く」とあることから、この部分は孔子の答えの末尾であったと推定される。続いて「どのような理由で帝となることができたのですか」との子羔の問いがあり、「昔は統治者が没すると、善と善とによる交代、すなわち禅譲がおこなわれたので、よく天下が治まり、万国が領地の大小・肥瘦の別なく、…された」と孔子の答えが記されている。

馬承源氏がこの第一簡を堯舜部分と見なした理由は、舜に該当する「有虞氏」の語と「昔は而て世を殁うるや、善と善と相受くるなり」という禅譲に関する記述とがあったためと考えられる。しかしこの点については、

・堯舜部分の他の竹簡に見える表記はすべて「舜」であるのに対し、第一簡のみが「有虞氏」と表記され、しかも有虞氏の楽正であった宮（夔）の出自に重点がおかれている。

・堯舜部分の他の竹簡はすべて堯から舜への禅譲、とくになぜ舜に禅譲されたかが中心的な主題であるのに対し、第一簡の記述は禅譲についての一般的な説明となっており、必ずしも堯から舜への禅譲と限定的に結びつくものではない。

という問題が指摘される。逆に第一簡には、

・宮（夔）は禹・契・后稷と同様、有虞氏に仕えた臣下である。

・相互の関連は不明ながら、宮（夔）についても禹・契・后稷と同様、出自に関わる言及が見える。

など、三王部分との間に顕著な共通性が認められることから、第一簡は堯舜部分ではなく三王部分に属する簡と見るのが妥当であると考えられる。

ここであらためて注意を要するのは、『子羔』に分類された十四枚の竹簡は、堯舜関係の簡と三王関係の簡とに明確に二分され、両者にまたがるような内容は全く見られないという点である。もちろん、缺失した竹簡の中にそうした内容が含まれていた可能性は否定し得ないが、少なくとも現時点においてはそれを裏付ける積極的な根拠は見いだされず、むしろ両者の内容上の差異は明瞭と言えるのである。こうした点を踏まえれば、『子羔』は孔子と子羔による堯舜に関する問答と三王に関する問答との二つの独立した内容であった可能性が指摘されよう。

次章ではこの問題について、構成の面から検討を加えてみたい。

三

『子羔』が堯舜部分と三王部分とに独立していたとすれば、各部分はそれぞれどのように構成され、冊書全体においてどのように配置されていたのであろうか。

行論の便宜上、冊書における順序とは逆に、まず三王部分について見ると、『子羔』釈文考釈が示す通り、その冒頭は「子羔、孔子に問いて曰く、三王者の作れるや、皆人の子なり」ではじまる第九簡、末尾は「…三天子之に事う」で終わって墨節が付され、それ以後が白簡となる第十四簡であったと見なされる。

篇や章の第一簡冒頭部分には圏点などの符号が付される場合もあり、第九簡上端にそうした符号が見えない点をもって、前段に位置した堯舜部分と連続していたと解釈する可能性も考慮されよう。しかし、これについては『魯邦大旱』の冒頭と見なされる第一簡「魯邦大旱す。哀公孔子に謂う…」の上端部分にも記号などは全く見られないことから、いずれも篇・章の末尾に墨節を付して、冒頭部には符号を付けない形式であったと理解される。

また、前章の検討により新たに三王部分に加わった第一簡については、内容から見て、三王の出生に関わる一連の記述が始まる第十簡の前に配置するのが妥当であると考えられる。

それでは次に、堯舜部分の検討に移ろう。上述のごとく、背面に「子羔」の篇題をもつ第五簡が堯舜部分に属し、通常、篇題は冊書の先頭かそれに近い簡の背面に記されることから、堯舜部分は冊書全体の先頭に位置したと見てよい。したがって、子羔と孔子との問答が一定の展開を見た後に堯から舜への禅譲の話題が出されたという状況は想定し得ず、冊書の冒頭、すなわち堯舜部分の冒頭には、堯から舜への禅譲に関する子羔の問いを記した簡が存在した可能性がきわめて高い。現存の簡の中にそれが見えないのは、缺失によるものと推測される。

堯舜部分の末尾については、該当する七簡に篇・章の末尾を示す墨節は見られず、内容面からも問答の収束をうかがわせるような記述は認められない。ただし、ここで注目されるのは、第八簡の

……[illegible]而して和す。故に夫の舜の徳は其れ誠に賢なり。諸を畎畝の中に播き、而して君をして天下而く偁げしむ。子羔曰く、舜の如きは今の世に在りては則ち何若。孔子曰く

に見える子羔の問いと、『孔子詩論』第一簡の墨節の前に位置する冒頭八字、

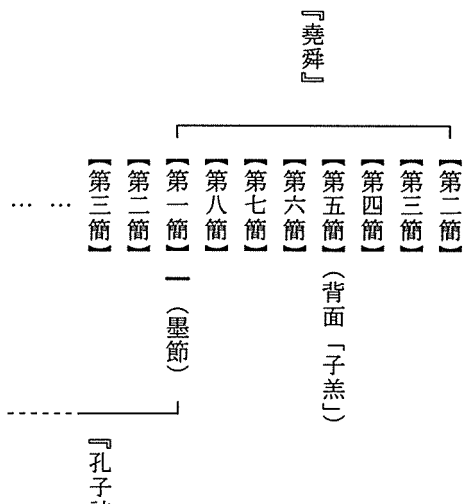
……行此者其有不王乎(注3)。

との関連である。

第八簡後半に見える「舜のようなひとが、今の世の中にいたとしたらどうでしょうか」との子羔の問いは、その直前の孔子の発言や堯舜部分の他の簡を総合すると、舜の徳がまことにすぐれていたので堯から禅譲されたのだ、というそれまでの孔子の話を受けて発せられたものと解釈される。したがって、それに対する孔子の答えは当然「今の世に舜がいれば、やはり同じように天下を統治しただろう」という内容であったと考えられる。そして、『孔子詩論』第一簡の墨節の前に位置する冒頭八字の「……此を行う者は其れ王とならざること有らんか」の部分は、欠損を含むものの、まさにそれと符合する内容となっている。すなわち、堯舜部分の末尾は、『孔子詩論』第一簡の冒頭八字に比定され、そこに付された墨節は、堯舜部分の末尾を示すと理解されるのである。

これまでの検討を踏まえるならば、『子羔』の一部とされてきた堯舜部分と三王部分とは、それぞれ末尾に墨節をもち、構成の上でも独立していたと考えられる。ここで、あらためて堯舜部分を『堯舜』、三王部分を『三王者』として明確に区分し、現存の残簡により、それぞれの構成を図示すると以下の通りである［図2］。

［図2］



『孔子詩論』第一簡の墨節の前に位置する冒頭八字について、馬承源『孔子詩論』釈文考釈は、この部分が王道を論じたもので、『子羔』や『魯邦大旱』の内容とそぐわず、墨節の後に始まる『孔子詩論』の「詩序」とも異なることから、別の内容と推測している。これに対して、李零『上博楚簡三篇校読記』（万巻楼図書有限公司、二〇〇二年三月）は、『子羔』の第五簡の背面にある「子羔」の文字を篇題と見て、全体を《子羔》篇（注4）ととらえ、その内部が『三王之作』『孔子詩論』『魯邦大旱』の三部分で構成されるとし、『孔子詩論』第一簡の冒頭八字は『三王之作』の末尾にあたると推測している。

上述した筆者の見解は、馬承源氏が除外した『孔子詩論』第一簡の冒頭八字を『三王者』の末尾とする点では李零氏と立場を同じくするが、李零氏はその接続について未だ具体的に言及していない。また、『子羔』に該当する十四簡を『孔子詩論』の第一簡（八字）とあわせて『三王之作』として一括する点では、李零氏の見解はむしろ馬承源氏に近く、『三王之作』の十五簡を『堯舜』の八簡と『三王者』の七簡とに区分し、両者はそれぞれ内容・構成の両面において独立していたとする筆者の見解とは大きく異なっている。

本章の最後に、《子羔》篇の全体構成をあらためてまとめてみよう。これまでの検討を踏まえれば、《子羔》篇全体は少なくとも、

・『堯舜』―（墨節・連続）『孔子詩論』（注5）
・『魯邦大旱』―（墨節・白簡）
・『三王者』―（墨節・白簡）

の三つのまとまりによって構成されていたと推測される。前述したように『堯舜』『孔子詩論』については、この順で《子羔》篇の先頭に位置したことは明らかであるが、『魯邦大旱』と『三王者』との順序については不明とせざるを得ない。しかし、何れにしても『子羔』として一括されていた『堯舜』と『三王者』とは、全体構成の上からも独立した内容であったことが裏付けられるのである。

結語

小論の検討によれば、《子羔》篇は『堯舜』『孔子詩論』『魯邦大旱』『三王者』などの複数の内容で構成された冊書であったと推測される。したがって、この冊書の全体を第五簡の背面に見える「子羔」の二字をもとに《子羔》篇と称することは可能であるとしても、篇の全体に子羔に関わる何らかの一貫した著作意図を見いだすことは困

難である。この冊書に「子羔」という篇題が付された主たる理由は、おそらく先頭に位置した『堯舜』の冒頭が『三王者』と同様「子羔、孔子に問いて曰く」と「子羔」の二字で開始されていたことによるものであろう。小論で指摘した内容・構成の特色を踏まえるならば、《子羔》篇は、孔子とその弟子に関わる儒家系の雑纂と見るのが穏当な理解であると考えられる。

注

(1)「馬承源先生談上海簡」(『上博館蔵戦国楚竹書研究』上海書店出版社、二〇〇二年三月)には、二二五七±六五年前という中国科学院上海原子核研究所の測定値が紹介されている。一九五〇年を定点とする国際基準にしたがえば、前三〇七±六五年、すなわち前三七二年から前二四二年となり、下限は上述のように秦の白起が郢を占領した前二七八年に設定されることから、書写年代は前三七二年から前二七八年の間となる。

(2) 以下の訓読は『上海博物館蔵戦国楚竹書(一)』所収の『子羔』図版・釈文考釈により、可能な限り通行の文字に改めた。なお、前後の……は、竹簡の上端・下端が残缺していることを示す。

(3) 引用は『上海博物館蔵戦国楚竹書(一)』所収の『孔子詩論』図版・釈文考釈により、可能な限り通行の文字に改めた。

(4) 以下、混乱を避けるために、第五簡背面の「子羔」の篇題にもとづく冊書全体の篇名を指す場合に限り《子羔》篇と表記する。

(5)『魯邦大旱』『三王者』の冒頭がいずれも竹簡の先端から開始されていることを踏まえれば、『孔子詩論』最終簡の末尾も『魯邦大旱』『三王者』と同様、墨節・白簡形式であった可能性が高い。ただし、缺失した部分に別の内容が含まれていた可能性もあり、この点についてはなお慎重な検討が必要である。

[付記] 小論は平成十四年度科学研究費補助金・基盤研究(B)「戦国楚系文字資料の研究」(研究代表者 竹田健二)による研究成果の一部である。